

【簿記の歴史】

簿記は中世のイタリアで発明

15世紀のイタリア。水の都ベネチア。基本ルールは500年以上一切変わっていない。

全世界で簿記のルールは共通。教育の現代の三種の神器は「英語・IT・会計（簿記）」。

航海商人が儲けを計算するために発明

当時、簿記原型となる考え方を帳簿に記して活用していたのもイタリアの商人。

実はこの時期はまだ、一回の船旅での儲けを計算するだけ。

そのプロセスは下記の5ステップで、利益を計算するためにお金の出入り（購入・販売）の記録を付けておいたのが簿記の始まり。

1. みんなでお金を出し合い、船を購入
2. ワインや香辛料などの商品を仕入れ、船に積み込む
3. 船で移動しながら販売
4. 商売が終わったら船を売却
5. 利益を計算

そもそも、会社はなぜ「決算書」を「説明」に使うようになったのか...はじまりは大航海時代！

15～17世紀、ヨーロッパ人が新大陸（アジア・アフリカ・アメリカ）と新航路を発見し、各大陸へ航海した。新大陸には、当時のヨーロッパでは手に入りにくい貴重品だった香辛料が豊富にあり、彼らは物々交換などを通じてこれらを現地で獲得。帰国後に高値で売却し、巨額の利益を得ることが流行した



航海で成功すれば、大もうけ！でも

「船の調達」「物々交換用の品物の仕入れ」「船員への報酬」など、**多額の資金が必要だった。**

さらに、当時の航海は、常に危険と隣り合わせ！遭難などが起これば、損失は莫大に...

そこで...

みんなでお金を出し合えば、より良い船や品物、船員を調達できるし
損失が出ても分散できる！

出資者

航海者

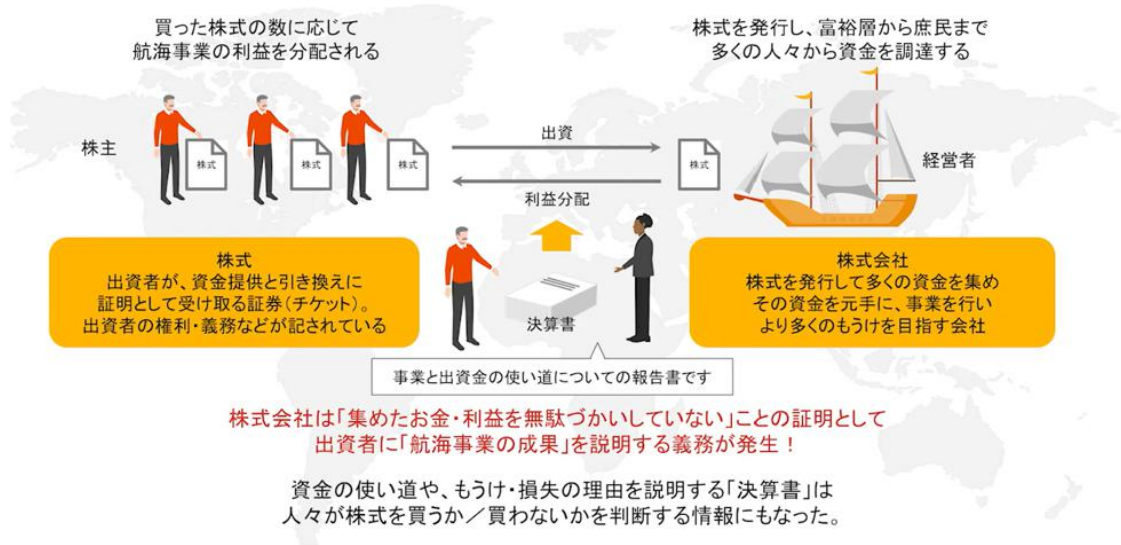
資金を出すから
良い品物を持って
帰ってきてね！

出資

利益分配

「株式会社・株式」と「株主」の誕生＝オランダ東インド会社

第1回目 初級簿記講習会



【単式簿記と複式簿記】

単式簿記とは、1つの取引に対し1つの科目で記録する記帳方法。

4月1日 売上 100,000

4月5日 仕入 20,000

日付・内容・金額を入力・記帳するだけで良い。「お小遣い帳」「家計簿」をイメージ。

複式簿記は、1つの取引に対し2つに分けて（借方、貸方）で記録する記帳方法。

単式簿記に比べて複雑な記帳になりますが、後払いの売上やクレジットカードでの支払いなどをより正確に記録できる。会社の会計は複式簿記で行う。

また、自営業やフリーランスの方は複式簿記の帳簿で確定申告をすると、青色申告（特別控除）の対象になる。